

チュルゴの未発表資料(Ⅱの1)

Archives du château de Lantheuil の初期未発表資料
1750 年の Sorbonne の開講講演の草稿 (2)

Archives du château de Lantheuil の多くの Turgot 文書のなかに、2 葉の表裏両面に書かれた 1 通の未発表書簡がある。発信者は l'abbé de Cicé l'aîné、宛先きは A Monsieur. Monsieur l'abbé de Turgot en l'Hôtel de Monsieur son père, rue Porte foin. A Paris, 日付けは 1744 年 11 月 6 日である。つまり、この書簡は友人 abbé de Cicé が、当時パリ市長(prévôt des marchands)であった父の家から Collège de Bourgogne に通う 17 才の少年 Turgot にあてたもので、Turgot は前年の 1743 年に神学の勉強をはじめたばかりであった¹⁾。abbé de Cicé は、のちに Turgot が Soissons のアカデミーの懸賞論文に応募することや John Law 批判のための紙幣論を手紙で書きおくることになる友人である。abbé de Cicé はこの書簡で神の認識やプロテスタンとカトリックの論争等について語っているのだが、Turgot はこれに返事を書こうとしたのであろうか、上記の宛名がきの余白に自筆で以下のような断片を書き残している。

Les hommes choisissent les objets par la volonté, mais ils ne choisissent point leurs volontés présentes. Leib[niz], Rem[arque] s[ur] le livre de M^r Hobbes. parag. 5.

Une société est un assemblage d'hommes unis et très raisonnables par des devoirs mutuels. Ainsi deux ou plusieurs hommes dans l'état où les suppose M^r Hobbes ne seraient point en société quoiqu'en disent M^r Puffendorf et Barbeyrac.

Le mariage dans la constitution du gouvernement présent est une société. Ce ne seraient pas une dans la république de Platon.

L'église dans le système des Catholiques romains est une société dans le système Protestant de M^r Jurieu. Ce n'est qu'un assemblage.

Livre premier de la religion naturelle.

Section première de l'obligation de suivre la volonté de Dieu.

Section seconde. Du but que Dieu a eu en créant le monde recherché par la seule raison.

Chapitre premier. Du droit que Dieu devait imposer des obligations.

Ch. 2. Des obligations qu'il nous a imposées.

Ch. 3. Des peines et des récompenses.

Ch. 4. Réponses aux objections.

これらの断片の後半が Turgot 自身の著述の構想で、1748 年の『著述予定一覧』の『自然宗教、詩²⁾』となんらかの関係があるのかどうか、あきらかではない。また、このような断片では Turgot の意図を推測することさえむづかしいし、17 才の少年の断片を過大に評価すべきではないが、これらの余白への書きこみは、すくなくとも、こんにち目にすることのできる Turgot の自筆資料としては最も早い時期のものである。これらの断片は、Turgot がソルボンヌ付属神学院に入る以前から、すでに時代の動きに沿って正統神学にとらわれずに社会や宗教について自由に思索するところ多かつたであろうことを思わせるのである。これ以後の Turgot の思想形成の概略については、すでに前号でのべたので、ここではくりかえさない。

さて、以下にそのテキストを掲げた開講講演のための第 2 グループの草稿 2 つは、卒直な危機意識の表明のために多少上ずってさえみえる序論的な第 1 グループの草稿 2 つに比較して、検討すべき多くの問題点をもっている。ここでは、主として 2 つの草稿と実際におこなわれた開講講演の異同に留意して、開講講演のもつ意味を問うてみたいと思うのである。

2 つの草稿の執筆の順序はあきらかではないが、実際におこなわれた講演の構成を参考にすれば、Pensées そして Plan général という順序であったと思われる。すなわち、講演は序論と第 I 部・第 II 部からなる本論とに

1) *Oeuvres de Turgot* (Ed. Schelle). I. p. 20. Turgot は 1748 年末 Séminaire de Saint-Sulpice に入学後 abbé Turgot と名のるようになる (ibid., p. 21.) が、家庭では 1743 年からそう呼ばれていた。 (ibid., p. 80.)

2) *Ibid.*, I. p. 115. 津田内匠「チュルゴの未発表資料(Ⅱの1)-(1)」『経済研究』第 25 巻第 1 号 (1974 年 1 月) 51 ページ 参照。

分かれている。まず序論では、「キリスト教は人間に永遠の幸福を期待させて現世が提供する幸福の享受を人間から奪い」、「天才を消滅させ、勇気をくじき、社会的美徳や自然の天分のかわりに架空の完成をおきかえて人間と社会の最も堅固な根底をくつがえす」というキリスト教非難の声に対して、Turgot は「もっぱら諸事実そのものにもとづいて」「キリスト教世界と偶像崇拜の世界の忠実な対比」をおこない、「世界がキリスト教からうけとった諸利益の証明」をおこなうことがこの講演の目的である、とのべている。ついで第Ⅰ部では、「人間そのものへのキリスト教の諸影響」が検討され、キリスト教の人類文化への貢献、キリスト教による普遍的愛の完成、キリスト教による習俗(mœurs)の改善が考察されている。第Ⅱ部では「政治社会の構成と福祉へのキリスト教の諸影響」が論じられるのだが、そこでは古代・異教世界の政治機構とキリスト教世界のそれとが対比され、キリスト教が政治に習俗を導入し、それによって「いたるところで専制主義を弱めたという利益」が強調され、「この宗教の限界が統治の柔和さと公共福祉の限界であるように思える」とのべられている³⁾。

このような構成をもつ講演に対して、Pensées は非常に簡単な序論のプランと講演の構成とはほぼ同じ順序で並べられた 29 コの断想からなっており、4つの草稿のなかでは最も長大なもので、そこには多くの論点を書きこまれている。おそらく Turgot は、断想の形式で整理した構想を、つぎに Plan général で講演の形式に書きかえようとしたのであろう。Plan général では序論の部分は講演のそれにほぼ近い形にまとめられ、本論は断想の形式ではなく第Ⅰ部・第Ⅱ部に分けて書き下されている。第Ⅰ部は講演のそれのように上にのべた 3つの部分に細分されてはいないが、内容的には 3つの問題を全部ふくんでいる。しかし第Ⅱ部は非常に短かく、講演のそれに比較すればほとんど展開はなく、おそらくは未完のメモ書きのようなものとなってしまったのであろう。

第1グループの2つの草稿から第2グループの2つの草稿をへて講演にいたる序論の部分の変化は、生々しい危機意識の表明から抑制された簡潔で理性的な問題提示への変化であった。第2グループの2つの草稿から講演にいたる本論の部分の変化も基本的には同じく草稿での卒直な論述を削除や省略によって簡潔に構成的に整理し、講演の第Ⅱ部に力点をおいてまとめる方向にあった。細かい表現上の変化や副次的な論点の異同はともかくと

して、草稿と講演との間にある特徴的な変化を2つ指摘することができる。第1には、聖ヴァンサンの名で知られる Vincent de Paul(1581-1660)の慈善活動についての論述であり、第2には、Montesquieu 批判である。

Vincent de Paul は Bossuet の師にあたるフランスの司祭で愛徳信心会を設立して農民や貧民の救済にあたり慈善と布教の活動に専念した献身の人であった。Turgot はこの Vincent de Paul をキリスト教の慈善の典型として、Pensées と Plan général でその活動を熱っぽく描いて称讃を惜しまなかった。「ヴァンサン・ドゥ・ポール、この人こそ、キリスト教がその魂に完全に刻みこまれた人である⁴⁾」。しかし、この熱烈な讃辞は講演では跡形もなく削除されている。

Turgot の Montesquieu 批判は Pensées と Plan général の双方にみられる。これはもともと Montesquieu が『法のスリについて』(De l'esprit des lois)のなかで世界の政治形体を共和政と君主政と専制政の3政体に分類し、これらの政体を動かす「原理」として共和政には徳、君主政には名誉、専制政には恐怖をあてた、いわゆる「政体論」に対する批判であるが、Turgot のいわんとするところは、たんに Montesquieu の政体論批判にとどまらず、そこから出発して普遍的な人類愛を訴えることにあった。すなわち、Turgot によれば、古代ギリシア・ローマの共和政を支えた Montesquieu が称揚する「徳」つまり祖国愛は、同じく Montesquieu が君主政を支える原理とする「名誉」と同じ「偏見」にすぎず、一種の民族的ファナチズムにすぎない。ギリシア・ローマ人、ことにスパルタ人のように、共和政の「徳」を市民にだけ認めて、奴隷や敵に対しては野蛮であることは、もっぱら他人の不幸のために結合する盗賊集団の考えにほかならない。このような「徳」がユマニテの感情にも正義の観念にも根ざさないことはあきらかである⁵⁾。「私は追剥ぎ強盗集団の熱心さや獲物を等分に山分けする几帳面さを徳とは呼ばない。いや、キリスト教はこのような徳を鼓吹したりはしないのである⁶⁾」。Turgot は Montesquieu の名をあげて批判したあと、一般的に「祖国愛とは同胞市民の幸福を願う愛であるよりは、むしろ異邦人に対する共通の憎しみであった⁷⁾」といい、さらに、このような近隣に対する狭く感覚的な愛ではなく、「いっそう強くないかもしれないが、いっそう広大な人

3) Ibid., I. pp. 194-214.

4) Pensées 8. p. 141 ; Plan général. p. 157-158.

5) Pensées 8. p. 141.

6) Plan général. pp. 155-156.

7) Pensées 13. p. 143 ; Plan général. p. 155.

類愛」をもつべきであるというのである⁸⁾。以上の文脈のなかから、Montesquieu に対する名ざしの批判の部分は講演で完全に削除され、偏狭なパトリオチズムの否定と普遍的な人類愛の強調の部分は、草稿でこれらが書かれている第 I 部つまり人間そのものへのキリスト教の諸影響が論じられている部分から削除され、講演の第 II 部つまり政治社会の構成と福祉へのキリスト教の諸影響が語られる部分に移して生かされている⁹⁾。

草稿での Vincent de Paul に対する Turgot の熱烈な讃辞と講演での削除、草稿の第 I 部での Turgot の峻烈な Montesquieu 批判と講演での削除、偏狭なパトリオチズム批判と普遍的な人類愛の強調の草稿の第 I 部から講演の第 II 部への移し換え。これらは一見、相互に無関係にみえるが、ここには、これらをすべて結び合わせる、ある鮮明な一本の糸があるように思われる。

2つの草稿で Turgot がキリスト教的慈善の個人的具体例としてあげたのは Vincent de Paul だけではないが、それらはすべて講演では姿を消している。草稿でも講演でもキリスト教的慈善の体現者として言及され称讃されているのはすべてイエズス会とフランス歴代のクリスチャン国王であることに注意すべきであろう。Turgot はたしかに Vincent de Paul をたんに感情的な慈愛の人と理解したのではなかった。ロレーヌ地方の戦乱のさなかの慈善活動やクロムウエル治下で呻吟するイギリスのカトリックに対する救援活動にも言及して、Turgot は Vincent de Paul の慈善と布教の活動が普遍的な人類愛にたつものであることを示そうとした。しかし、2つの草稿から講演にいたる過程で、Turgot は個々のキリスト教徒の慈善を示すのではなく、たとえばイエズス会の伝道によるアメリカ新社会の教化やキリスト教の普遍的な人類愛によって教化されたフランス君主政の「統治の柔和さ」の伝統やキリスト教による絶対主義の不断の啓蒙の必要を強調することを講演の基調とすべく転換した、と考えられるのである。

このことは、さきにみた2つの草稿の第 I 部でのあからさまな Montesquieu 批判と講演の第 II 部での隠された Montesquieu 批判とについてみれば、いっそうはっきりするように思われる。

Montesquieu が『法の精神について』のなかで、共和政には徳、君主政には名誉、専制政には恐怖というふうに各政体ごとに「政体の原理」(Montesquieu はこれを

政体を動かす情念ともいう¹⁰⁾)を対応させたのは、単なる形式的分類のためではなかった。共和政を動かす原理としての「徳」は平等と質素を旨とする原理であり、この「徳」によって支えられる共和政は清潔な平等政治をめざすが自由な経済活動を許容しない政体であることを意味する。共和政の場合、「徳」は市民的自発性にもとづくものであるが、専制政を支える「恐怖」は土地と商業を独占する唯一者によって強いられた平等と質素を維持するための原理である。「徳」と「恐怖」とは正反対の位置関係にあるだけの静態的社会の原理にほかならない。Montesquieu が君主政の原理とする「名誉」は、以上の2つの政体の場合に比較して複雑である。Montesquieu はこれを Mandeville に学んで、各人が私益を追求するかみえて公益に寄与する原理と呼び、不平等を建前とする君主政下において「各人・各身分の偏見(=固有の見解)」を自由に発揮させる原理であると考えた。いわば「名誉」はMontesquieu にとっては唯一の動態社会の原理である。しかしこの「名誉」という原理はイギリス市民社会の哲学・経済学等の基底にあった「自利心」の解放を意味するものではない。それは封建制からの「各人・各身分」の一定の解放を意味するとともに、職能的あるいは身分秩序的規制をいまだ色濃く残すものであった¹¹⁾。すなわち、この「名誉」の原理のもとで、貴族中間権力が国王と人民との間に介在し、国王の圧制から人民を守り、人民の専制から国王を守り、また立法府と行政府を相互に制御させ、それによってはじめて君主政に「政治的自由」を確保するのである。「名誉」の観点こそは法服貴族としての Montesquieu の絶対王政の相対化の構想の中心点であった¹²⁾。

Montesquieu の大著『法の精神について』は、一方ではすでにイギリスにみられる市民社会の進展を念頭におき、他方、フランスの真の担い手は貴族かブルジョワジーかという Boulainvilliers と Dubos に代表される国内の論争を強く意識しつつ、フランス絶対王政のあり方をめぐって示された示唆に豊む、広範でかつ深刻な問題提

10) Montesquieu, *De l'esprit des lois*. Liv. III, chap. 1. 以下『法の精神について』からの引用は、その篇と章の数を引用句の後に記入する。引用は Masson 版に従う。

11) 「君主政体は身分的権威、地位そして生まれによる貴族制をすら前提とする。名誉の本性は偏愛と寵遇を求めることにある。」『法の精神について』第 III 篇第 7 章、参照。

12) 津田内匠「Montesquieu における歴史と経済」『経済研究』第 15 巻第 3 号、参照。

8) *Pensées* 13. p. 143

9) *Discours, Œuvres de Turgot* (Ed. Schelle). I. pp. 203-210.

起の書であった。Turgot も Montesquieu から多くを学びつつ、対抗的に思想を形成していた。前号でのべたように、Turgot は 1748 年の諸断片で Montesquieu から示唆をえて、かれの風土論に反論を試みたが、それはたんなる風土論批判としてではなく、法服貴族の立場からする Montesquieu の絶対王政批判に対する反批判の試みとしての意味がより重大であった。1750 年のソルボンヌ開講講演の準備も、基本的にはこうした Montesquieu との対抗関係の延長線上にあったとみるべきであろう。Turgot の Montesquieu 批判は間接的な風土論批判から直接的に Montesquieu 体系の中軸をなす政体論批判へとすすんだ。しかし、それは一方的な否定ではない。ひそかな受容とはげしい排撃との交錯である。

2つの草稿を仔細に検討すると、かすかにあるいは明瞭に Montesquieu を想起させるいくつかの章句にであう。それらの多くは断片的であったり副次的な論点にすぎなかったりして、草稿のすすむうちに姿を消していったものもあるが、2つの草稿から講演にいたるまで一貫して、しかも重要な役割をになって存在するいくつかの論点のなかに、あきらかに Turgot が Montesquieu から批判的に摂取したものがみられる。法と習俗の関係についての論点がそれである。

18 世紀にしきりに用いられた習俗(mœurs)という概念は、たんに風俗習慣を意味するものではない。それは風俗習慣に表現される国民の気質とか心がけといった類いのもので、制度にもとづく法的規律とは別の、より基本的な慣習的生活規範である。

Montesquieu は、一般に現実の社会においては政体の区分と関係なく、「風土、宗教、法律、統治の格率、過去の事例、習俗、生活様式」(XIX. 4)が人間を支配していると考えのだが、これら現実を支配する諸原因のなかで、習俗のもつより根源的な役割を強調してつぎのようにのべている。すなわち、「法は制定されるものであり、習俗は感得されるものである。後者はむしろ一般精神に由来し、前者はむしろ一特殊制度に由来する」(XIX. 12)、「習俗と生活様式(=礼儀作法)は、法が制定しえなかったにせよ制定することを望まなかったにせよ、法が制定しなかった慣行である。法と習俗との間には、法はむしろ市民の行動を規制し、習俗はむしろ人間の行動を規制するという相違がある。習俗と生活様式との間には、前者はむしろ内的行為にかかわり、後者はむしろ外的行為にかかわるという相違がある」(XIX. 16)と。しかし『法のスリ神について』の論述はすべて政体論とのかかわりにおいて真の意味をもつ。かれは、この根

源的役割をもつ習俗を各政体に位置づけて、共和政においては「祖国愛は習俗の善良さを生み、習俗の善良さは祖国愛にいたる」(V. 2)、「君主政においては、習俗はつねに共和政におけるほど純粹ではない」(IV. 2)、そして「ヨーロッパ諸民族の大部分はいまだ習俗によって治められている。…(しかし)専制政がある程度うちたてられれば、習俗も風土もそれに抵抗しえないだろう」(VIII. 8)とのべている。Montesquieu は、ここでは政体と習俗との適合関係をいっているのであって、かならずしも直接的に共和政体を推賞しているのではない。かれは共和政と習俗との完全な適合関係をいい、専制と習俗との決定的な不適合関係をいい、君主政と習俗との不安定な適合関係をいうことによって、君主政がそのままでは専制政へと転落する危機を内包していることを暗示しているのである。

Turgot は 2つの草稿と講演を通じて、習俗を Montesquieu とほぼ同様の意味に用い、外的に規制する法と内面に働きかける習俗という Montesquieu の説明方法にしたがっている。しかし、さきにみたように、Montesquieu の政体論を激しく批判した Turgot は、政体の区分とは関係なく、あるいはむしろ Montesquieu が疑点を示す君主政においてこそ、習俗が直接的に法を改善することをいい、「法より強力な習俗」に根源的な力を吹きこむものとしてキリスト教をあげ、ここにキリスト教—習俗—法という明解な直線的関係を示すことによって、この開講講演の根幹をあきらかにしたのである。

「祖国愛は習俗の善良さを生み、習俗の善良さは祖国愛にいたる」という Montesquieu の表現は、いわば Turgot によって「祖国愛」を「キリスト教」と「人類愛」とに書き換えられた。キリスト教は習俗の善良さを生み、習俗の善良さは人類愛にいたる、ということになる。

すでにテキストの異同についてみたように、Turgot は 2つの草稿の第 I 部で Montesquieu の政体論を仮借なく批判したが、講演ではこれを削除した。おそらくは公開講演での露骨な Montesquieu 批判をはばかったことであろう。かわりに Turgot は、Montesquieu の政体論批判から導きだされた偏狭なパトリオチズムの否定と人類愛の強調を 2つの草稿の第 I 部から講演の第 II 部に移し、Montesquieu から批判的に学び、すでに 2つの草稿以来準備してきた法と習俗とにかんする論点にそれを接合して、つまり隠された Montesquieu 批判と Montesquieu からの批判的継承とによって、Montesquieu の絶対王政批判に対抗しうる構想を示そうとしたのであろう。Turgot は Bossuet のように絶対王政をいわばさ

らに絶対化する意図は決してなかったが、Montesquieuのように法服貴族を中心とする中間権力の介入によって絶対王政を相対化する構想には一貫して反対であった。Turgot はもっぱら絶対王政の啓蒙化の構想のなかで Christianisme を強調したのである。

「キリスト教のみがそれに成功した。キリスト教のみがユマニテの諸権利を明白なものとした。ひとはついに人間と社会の結合の真の諸原理を知った。ひとは自分の属する社会に対する偏愛をユマニテ全体の愛と結合することができたのである」¹³⁾。

「人間をすべてをみそなわす神の眼前におくことにより、キリスト教は人間の情念にそれを制御できる唯一の抑制を与えた。キリスト教は人間に習俗、つまりすべての外的関係、市民法よりも強い内面の法を与えたのである。法律は捕え、法律は命令する。習俗はもっと上手にやる。習俗は説得するのである。習俗はひとの気持をひきだし、命令を無用のものとする」¹⁴⁾。

「キリスト教によってはじめ、法律はもはや抑圧の手段ではなくなった。法律は強者と弱者の間のバランスを保った。法律は真に公正なものとなった」¹⁵⁾。

「君主と臣下は交互に勝利して、国家をたえず専制から放縦へ、無政府から専制へと動かす相対立する2つの勢力ではもはやなくなる」¹⁶⁾。

「臣下の幸福と国王の権力とが互いに支えあう役目を果たしている国民は幸いなり！」¹⁷⁾。

この Christianisme の強調には Bossuet 神学の影はない。Bossuet はかれの『世界史論』(Discours sur l'histoire universelle. 1681)を「時代の連続」・「宗教の連続」・「帝国の連続」という3つの連続で構成し、それらを「世界の連鎖」という観点で結合し、「偉大なる全体の諸部分が相互に依存しあう」¹⁸⁾ことを神が欲したもう、とした。このすべての歴史的事象を連続・連鎖・連関という形で因果関係的に捉える方法が Turgot にも深い影響を与えたであろうことは否定できない。しかし「すべてを摂理に帰すべし」(III・8)とする Bossuet にとって、この方法はもっぱら「神の民の連続」(II・29)と「カトリック教会の連続」(II・30)を不動のものとするためのものにほかならない。「諸帝国を興亡せしめる特殊

な諸原因のこの長い連続は神の摂理のひそかな命令に依存するものであることを記憶すべきである。」(III・8) Turgot の開講講演はすくなくとも2つの点で、前世紀に考えられたように Bossuet の延長線上での啓蒙化・合理化の試みではない。Turgot を Bossuet から決定的に分かつものは、第1には、Bossuet が努力した俗史を聖史に合致させる意図はもはや Turgot にはないこと、第2には世界史を導く神の摂理の必然性に反する「偶然」を Bossuet は認めない(III・8)のに対して、Turgot は「人間はとにかく経験の模索のために作られている」¹⁹⁾以上、「偶然」はむしろ人間に多様な可能性を保証するとして、「偶然」の意義を積極的に示すことである。これらの点は2つの草稿から講演まで一貫しており、すでに1748年の諸断片以来のものである。

こうして、Turgot は狭く囚われた神学を離脱した。かれは講演のテーマをキリスト教の utilité に限定し、それによって「進歩」の一般を展望するのである。このことは、開講講演にかぎってみても、Turgot が2つの草稿と講演で一貫してアメリカ新大陸における政治社会の経済発展を高く評価しているところにもうかがえるのだが、やがて閉講講演で、いわゆる「進歩の歴史観」を示すものとして知られるようになる有名な表現がすでに *Pensées* にしばしばみられることに注目すべきである。たとえば、「静穏と激動、善と悪とが交錯して、人類全体はつねに完成へと進む」²⁰⁾。しかし、これらの表現は *Plan général* でも講演でもみられなくなる。いうまでもなく、草稿がすすむうちに、Turgot はそれらを閉講講演のテーマの方へ分離したのである。前号でとりあえず、開講講演は Bossuet の神学的歴史観の影響下にあったのではなく、むしろ Bossuet を克服して Turgot 自身の「進歩の歴史観」を展開するための試論であり、その意味では開講講演全体が閉講講演のための序論であったといえてよい、とのべたが、いま2つの草稿と講演の検討をへて、以上のことは確認できるであろう。

Turgot の Christianisme の強調は Voltaire 流の理神論への接近である。Voltaire は1731年に『カール12世の歴史』(*Histoire de Charles XII*)を発表して以来、歴史家としての活躍をはじめ、しだいに世界史の構想をいだくようになる。一種の英雄伝にすぎない『カール12世の歴史』はともかくとして、Voltaire は1745年にすでに世界史論の構想を示す『諸国民の習俗と精神についての試論』(*Essai sur les mœurs et l'esprit des*

13) *Œuvres de Turgot* (Ed. Schelle). I. p. 210.

14) *Ibid.*, I. p. 212.

15) *Ibid.*, I. p. 210.

16) *Ibid.*, I. p. 123.

17) *Ibid.*, I. p. 211.

18) Bossuet. *Discours sur l'histoire universelle*. (Ed. conforme à celle de 1700). Paris. 1860. III^e partie. chap. 2.

19) *Œuvres de Turgot* (Ed. Schelle) I. p. 207.

20) *Pensées*. 15. p. 144.

nations)の一部を雑誌『メルキュール・ドゥ・フランス』(Mercure de France)に発表している。Turgot が1748年以來、Bossuet や Montesquieu をのりこえんとして、なんらかの形で Voltaire の影響をうけたとみることは可能であろう。この時期の両者の関係については、別に詳しい論証を必要とするが、キリスト教が習俗を介して「人間の情念にそれを制御しうる唯一の抑制 (le frein) を与えた」とか、「習俗は万人に対する最強の抑制 (le frein) であり、国王に対するほとんど唯一の抑制である」²¹⁾という Turgot の表現は容易に Voltaire を想起させ、宗教を世俗化して市民的倫理の合理的枠組みに転用する理神論の特徴を想わせるのである。Turgot は Pensées 26 で「主権はおそらく人民に属するであろうが、人民はつねに不安定で、つねに自分の利害について無分別で、つねに他人の利害に対して不公正で、つねに気まぐれで、自分のものを自分で管理できなくてつねに後見人を必要とする子供である」といい、同じく Pensées 29 でも「人民は自分のためにしか自由を求めない。かれらは人類のための自由をすこしも好まない」といい、講演では多少調子がやわらげられてはいるものの、民衆に対する不信と蔑視をかくさず、このことから、キリスト教と良い習俗による教化と啓蒙の必要を説くのである。ここには、Voltaire と同じく理神論的な生活規範によって古い封建身分と闘い、かつ民衆を統御しなければならないブルジョワジーとしての Turgot の一面がうかがえよう。

しかし、この Christianisme の強調をとおして、Turgot が訴える世俗的幸福の実現とは具体的には何であったか？ 第1グループの草稿で Turgot がキリスト教は根拠なく非難されているといった、その非難をことごとく現実に否定してみせることであった。すなわち、「キリスト教は、好奇心、野心、名誉心、富の欲望を禁じて、精神の涵養、才能、技能、労働、産業、商業を消滅させている」という非難、あるいは「個人から市民的な職業を遠ざけ、諸技術を発明し完成する競争心をなくさせ、商業をうみ商業を維持する富への愛を禁じる…²²⁾」という非難をくつがえすことである。つまり、第2グループの2つの草稿と講演で、Turgot が情熱的に描くアメリカ植民地における新しい社会の政治・経済的發展を広く実現することである。かれは Pensées 12 でつぎのように描いている。「これらの広大な地域では、未耕地は勤勉になった人手で豊かなものとなった。われわれの技術がそこではわれわれの悪徳なしにひろがっている。平等は奢侈を追放し、美德と習俗の単純さを自由とともに

そこに保っている。そこでは、ひとは戦争の荒廃も貧困の恐怖もしらない。忠実に遵守される法律はそこに永久の平穩を維持している。賢明に組織された労働が諸々の生産物をうみだし、それらは社会に帰属して必要に応じて各人に配分されている。」この描写はいささかユートピアにすぎる。しかし、それだけに、これは開講講演のテーマの真の狙いとかれの理想をよく示しているといえよう。Turgot はまだ、この時期には本格的に経済学研究には入っていない。Christianisme の重要性を訴えんとした、この開講講演は、結局のところ Turgot 自身にいったん Christianisme を離れて、直接的に社会の政治・経済分析に目をむけることの重要性を認識させたのである。1751年、突如として Turgot はソルボンヌを離れて行政のコースを選び、Vincent de Gournay の指導のもとでフランスの産業視察とイギリスの経済学研究をはじめ、やがて1753～54年ごろから経済学論文を断片的に書きはじめるのである。

ちなみに、1750年は Rousseau がその第1作『学問芸術論』(Le discours sur les sciences et les arts)を発表する年である。この論文は1750年7月9日に Dijon のアカデミーで1等当選論文となっている。7月3日に開講講演をおこなった Turgot はこの時まで Rousseau の論文を読むことはなかった。しかし、Rousseau は『学問芸術論』で Montesquieu の説を用いて、すでにかれ自身の経済学批判の一端を示している。両者の著作活動はすでに第1作から興味深い対比をともなっていたのである。

以上、開講講演のための4つの未発表草稿を検討して、これまで顧みられることのすくなかった開講講演の意味について考えてみた。あるいは Schelle がおそれたように、すでに「チュルゴのバトリオチスム観についてまちがった解釈」を与えたかもしれない。しかし、Schelle のおそれとはもとと Montesquieu の政体論についての無理解と Turgot と Montesquieu との対抗関係についての問題認識の欠如に起因するものであって、いわば杞憂にすぎなかったろう。多少 Turgot をひきよせて考えすぎたかもしれないが、とにかく Schelle が用心深く沈めていた淵の底から Turgot を引き揚げてみる必要はあった。

【津田内匠：一橋大学経済研究所】

22) 津田内匠「チュルゴの未発表資料(II-1)の(1)」『経済研究』第25巻第1号(1974年1月)57ページ、59ページ。

21) *Oeuvres de Turgot* (Ed. Schelle). I. p. 210.

**Pensées pour le Discours sur les avantages
que le Christianisme a procurés au monde**

Premier plan à choisir. Plan historique: commencer par exposer l'état du genre humain à la venue de Jésus-Christ; chercher les causes de l'idolâtrie, de l'athéisme, de la corruption des mœurs parmi les païens, de la superstition parmi les Juifs; peindre la révolution de l'établissement du Christianisme; en suivre les progrès, en marquer les utilités par des faits intéressants jusqu'à nos jours.

Second plan divisé suivant la méthode commune. Première partie. L'homme considéré en lui-même sans autres liens avec ses semblables que ceux de la nature; subdivision, plus éclairé, plus vertueux, plus heureux. Seconde partie. Les sociétés politiques; subdivision, plus sages dans les lois, plus soumises, plus libres. Autre.(sic)

On sent qu'il doit régner dans une grande partie du Discours une comparaison des effets des passions avec ceux de la Religion, et qu'il faut chercher dans l'histoire des faits où le jeu de ces différents ressorts puisse se découvrir.

Remarques diverses.

1 L'accord de l'autorité d'un seul avec la douceur du gouvernement n'a jamais été connu [chez] des anciens. La Religion, en adoucissant nos mœurs, en inspirant l'amour de l'égalité aux rois et la soumission aux peuples, a fixé les balancements perpétuels des passions humaines entre la tyrannie et l'anarchie.

2 On doit remarquer que les connaissances métaphysiques des siècles mêmes barbares étaient plus vastes et plus sûres que celles de l'antiquité la plus éclairée: S^t Thomas et les scolastiques raisonnent d'une manière plus claire et plus vraie que Platon et Cicéron. Il semble que le genre humain par rapport aux vérités mêmes que la raison lui montre d'une manière plus sensible ait une espèce d'enfance et que la Religion ait été pour lui ce qu'est l'éducation pour les hommes. Il semble qu'après les guerres des Normands, quand l'Université de Paris s'établit; lorsqu'elle entreprit de marcher d'un pas égal dans la carrière de toutes les sciences; lorsque l'histoire, la physique et les autres connaissances humaines ne pouvaient percer la nuit de ces siècles d'ignorance, l'étude de la Religion cultivée dans les écoles et en particulier dans ce sanctuaire de la théologie, cette science, toujours sûre dans tous les temps, ait comme prêté la main à cette partie de la philosophie qui lui tient de plus près et qu'elle l'ait élevée à un point où l'éloquence et le génie de la Grèce et de Rome n'avait pu la porter.

3 Je remarque que les combats de gladiateurs n'ont point été abolis sous Titus et les Antonins; on crie que Constantin était un tyran, mais si cela était, la Religion sait répandre par les mains des tyrans des bienfaits plus grands que la bonté même des plus grands princes privés de ces lumières; c'est à

Constantin, c'est à Jésus-Christ que la terre doit l'abolition de ces affreux spectacles. Il faudra les peindre. Quand on se plaint du sang qu'a souvent fait répandre un faux zèle pour la Religion, ces plaintes sont sans doute fondées. Les chrétiens sont hommes; ils ont défendu une cause juste avec des armes que la Religion condamne elle-même; mais ce passage d'un zèle allumé par la charité, à la fureur de la dispute qui éteint cette charité, passage que l'orgueil humain rend si aisé, surtout lorsque l'ignorance générale d'un siècle a répandu ses voiles jusque sur la Religion, en est sinon l'excuse, du moins le motif. Je vois des hommes entraînés dans l'erreur; cette erreur est cruelle; je les plains; mais, dans les affreux combats dont je parle, on verse le sang de sens froid, que dis-je, pour repaître ses yeux du plaisir de voir couler le sang. Oh, hommes! Ce sont là les plaisirs que vous vous êtes faits. Partout où l'empire de ce peuple roi que nous vantons avec tant d'acharnement s'est étendu, je vois les traces de leur domination dans ces vastes monuments de leur barbarie. Ce sont donc là ces restes de la grandeur romaine où les nations contemplent encore avec une curiosité avide et respectueuse la majesté de ce peuple roi des nations. O, vous, Louis 9, Louis 14, quelles différences vois-je dans les monuments qui nous restent de vous: des maisons secourables où le pauvre trouve un soulagement dans ses infirmités: l'Hôtel-Dieu, les Invalides, etc.! Monuments toujours précieux à l'humanité!

4 Je ne crois pas qu'on trouve chez les anciens d'exemples de cette charité ardente et universelle qui porte les hommes à se consacrer entièrement au service des autres: comme je l'ai remarqué, les hôpitaux, ces temples de l'humanité étaient inconnus parmi eux; le Christianisme a engagé mille personnes à y passer leur vie; des personnes de la plus haute naissance y viennent tous les jours servir les malades.

5 On peut joindre à cet article les exemples de ceux qui se sont exposés à la peste pour secourir ceux qui en étaient affligés: L'évêque de Marseille, S^t Louis, les médecins, les ecclésiastiques que la nouvelle du danger a appelés de tous côtés, plus attirés par le besoin qu'on avait de leur secours qu'effrayés par leurs propres périls.

6 Le caractère des premiers chrétiens. Les discours de Jésus-Christ, de S^t Jean, filioli, le témoignage rendu aux chrétiens par Julien même, dont l'apostasie donne un nouveau poids à son témoignage, prouvent que la Religion chrétienne porta dans elle-même les principes de cet esprit de zèle et d'humanité qui s'est répandu avec elle dans le monde.

7 La Religion chrétienne a rendu les guerres moins cruelles: on ne massacre plus les ennemis prisonniers; on ne les fait plus esclaves; leurs blessés trouvent dans nos hôpitaux les mêmes soulagements que nos propres soldats. L'humanité a encore inspiré un moyen de diminuer les maux inséparables de la guerre: c'est de les restreindre aux seules Provinces dont la possession

peut influer sur le sort de la guerre. On a vu, ces dernières années, M^r de Belle-Isle et M^r de Neuperg conserver la paix dans le Luxembourg et le pays Messin.

8 Tandis que le Cardinal de Richelieu et Gustave ébranlaient la puissance de la maison d'Autriche; tandis que des armées sans nombre tantôt victorieuses, tantôt fugitives promenaient la désolation et le ravage d'un bout de l'Europe à l'autre; que les peuples étaient également foulés par leurs ennemis et par leurs alliés, par leurs compatriotes mêmes, épuisés par les impôts dont il fallait soudoyer des troupes qui les ruinaient en les défendant; tandis que la malheureuse Lorraine, victime des caprices de son souverain, enclavée dans la France, sentant tout le poids de la puissance de nos rois sans jouir du bonheur d'en être gouvernée et protégée, exposée à tout le choc des deux parties entre lesquelles elle se trouvait etc. etc. etc., un seul homme, Vincent de Paul; cet homme dans l'âme duquel la Religion s'était imprimée tout entière, avec tout ce qu'elle a de grandeur, d'humiliation, de douceur et d'austérité, avec toute l'immensité avec laquelle il semble qu'elle embrasse l'univers par la charité et toutes les pratiques par lesquelles elle paraît se concentrer dans l'homme qu'elle veut sauver; cet homme qui ne distinguait point dans la Religion rien de grand ou de petit, parce qu'il voyait partout la Religion, Vincent de Paul entreprend de porter partout le remède à tant de maux; ses emissaires volent dans toute l'Europe et surtout en Lorraine; il anime le zèle et la charité de toute la France par toute la Lorraine, etc. Il faut chercher dans l'autel des traits pour cette peinture; j'en ai remarqué beaucoup. Sa prévoyance active semble marcher partout à la suite des armées pour guérir les maux que la guerre laisse après elle; c'est ainsi que, tandis que les passions ravagent la terre comme dans tous les temps, la Religion chrétienne contrebalance par ses bienfaits tous les maux qu'elles font.

9 Le caractère de Vincent de Paul mérite une attention particulière: je vois un homme qui entreprend à la fois d'instruire les peuples de la campagne, de porter la foi chez les nations étrangères, de soulager partout les malheureux; un homme qui semble dans toutes ses vues avoir cherché tous ceux dont les besoins étaient négligés. Veut-il instruire? Ce sont les peuples de la campagne; ses vues s'attachent partout au besoin et au plus grand besoin. Tout homme qui souffre à un droit sur lui; son soulagement devient son affaire propre; il cherche partout des malheureux pour les secourir: c'est lui qui le premier établit pour les galériens abandonnés des secours spirituels et temporels; c'est à lui que tant d'enfants abandonnés par leurs parents doivent la vie; il envoie des sommes immenses dans la Lorraine affligée; en même temps, il donne aux Catholiques gémissants sous la tyrannie de Cromwell toutes sortes de secours; il est l'asile de ceux que leur fidélité, soit à leur roi, soit à leur Religion, force à quitter leur patrie. Je ne connais point dans l'antiquité païenne de pareille vertu; je n'y trouve point d'hommes qui fassent ainsi leur affaire du bonheur

public et c'est ce que font encore toutes ces personnes qui se consacrent à servir les malades ou les pauvres dans les hôpitaux, à instruire les enfants, etc.

10 A la Chine, les parents sont dans l'usage d'exposer leurs enfants, quand ils n'ont pas de quoi les nourrir. Les lois sont muettes contre cet abus affreux. Les missionnaires arrivent du fond de l'Europe et sauvent la vie à une infinité de ces malheureux que l'inhumanité de leurs parents et la stupide indifférence des lois condamnait à périr.

11 Le P. Longueval rapporte dans l'histoire de l'église gallicane la fondation de l'abbaye d'Aubrac. C'était un lieu infesté de voleurs où périssent une infinité de personnes; un chevalier y passe; il fait réflexion que le danger qu'il a connu en menace mille autres; il prend la résolution de fixer son logement dans ce lieu, d'y rassembler des chevaliers pour chasser les voleurs et pour recevoir les voyageurs.

12 On voit dans ce qui s'est passé dans la découverte de l'Amérique la différence de l'action des passions avec celle de la Religion. Qu'on voie d'un côté l'avarice des Espagnols exerçant les cruautés les plus barbares, faisant disparaître tous les habitants de S^t Domingue, faisant périr dans les tourments les plus grands distingués, les rois mêmes du Mexique et du Pérou, dépouillant par les travaux des mines les plus vastes provinces. De l'autre, jetez les yeux sur les forêts de l'intérieur de l'Amérique; voyez une foule de missionnaires se disperser dans ces régions immenses, escalader les rochers, traverser des fleuves rapides, endurer les plus grandes fatigues pour courir après des hommes grossiers, non pour les réduire en esclavage, mais pour les rassembler dans des peuplades, pour en former des nations, pour en faire des hommes en en faisant des chrétiens. Dans ces vastes régions, la terre inculte est devenue féconde sous des mains devenues industrieuses; nos arts s'y répandent sans nos vices; l'égalité en bannit le luxe, et y conserve, avec la liberté, la vertu et la simplicité des mœurs; on n'y connaît point les ravages de la guerre ni les horreurs de la pauvreté; des lois fidèlement observées y maintiennent à jamais la tranquillité; un travail sagement ordonné produit des fruits qui appartiennent à la société et qui sont distribués à chacun selon ses besoins. Ces peuples des ténèbres profondes de la barbarie ont été portés tout à coup par les mains de la Religion à un bonheur plus grand que celui des nations les plus policées; c'est ainsi que l'Europe en portant sa Religion en Amérique a pu enfin guérir les plaies qu'elle lui avait faites. On a accusé d'ambition les bienfaiteurs de tant de nations; mais, en accordant à leurs accusateurs tout ce qu'ils assurent de leur puissance, y en eut-il jamais de fondée sur des titres plus légitimes que sur le bonheur des peuples?

13 Qu'est-ce que cette vertu dont le P. de Montesquieu fait tant de bruits? Les républicains grecs et romains aimaient plus leur patrie, mais cet amour même de la patrie, 1^o n'est-il pas un préjugé de la même espèce que ce

qu'il appelle honneur? N'était-ce pas tout de même un fanatisme de nation, un esprit répandu dans un peuple par les législateurs et soutenu dans chaque particulier par l'espèce d'équilibre qui se met entre la façon de penser de tous les membres d'une société, comme entre toutes les parties d'une liqueur qui restent dans leur place malgré leur fluidité, parce qu'elles se soutiennent les unes les autres? 2° la barbarie de ces mêmes peuples, surtout des Spartiates envers leurs esclaves et leurs ennemis, en restreignant cet amour du bien public aux seuls citoyens, ne donne-t-elle pas naturellement l'idée d'une troupe de voleurs très zélés pour la cause commune et qui ne sont unis que pour le malheur des autres? 3° toutes ces réflexions ne prouvent-elles pas que ces prétendues vertus ne sont pas fondées sur les sentiments de l'humanité ni sur les idées de la justice? En effet, cet amour de la patrie était moins l'amour du bonheur de ses concitoyens qu'une haine commune pour les étrangers. On sait que les mots d'hostis, de barbarus étaient synonymes à celui d'étranger, que les idées de vertu que présente la Religion chrétienne sont différentes: elle nous apprend que tous les hommes sont nos frères et la Providence a répandu dans nos cœurs une tendresse qui nous les fait aimer; mais, en même temps, la Religion admet cet amour de préférence qui s'attache à son pays, à son prince, etc. La Providence qui nivelle la pente de notre cœur avec autant de sagesse que de bonté, a rendu ce sentiment plus vif, pour tout ce qui nous environne de plus près; elle a réglé l'amour mutuel des hommes sur leurs besoins, à mesure que les hommes éloignent de nous: la vivacité du sentiment semble comme s'affaiblir en se répandant dans une plus vaste circonférence. Les hommes trop éloignés, incapables de recevoir nos secours, n'ont pas besoin de notre tendresse. Ils n'échappent en même temps à notre cœur et à nos bienfaits qu'en échappant à notre vue, dont toutes les forces semblent avoir été concentrées autour de nous dans la sphère des objets auxquels nous sommes unis par des services rendus et reçus, par la reconnaissance des bienfaits reçus et par le plaisir d'en répandre; de là, cette vivacité graduée du sentiment selon la distance des objets; de là, cet amour de ses proches, de ses amis, si vif, si ardent; celui de notre patrie, de notre gouvernement qui nous protège; amour plus actif peut-être que sensible; enfin, l'amour de l'humanité plus vaste, moins fort peut-être, mais toujours prêt à exercer ses droits sur nous, aussitôt que les hommes peuvent nous faire sentir le besoin de nos secours; degrés tous justes, quoiqu'inégaux, tous pesés dans la balance équitable de la bonté de Dieu.

14 Il faudra encore dire quelque chose des autres vertus chrétiennes, et surtout des vertus intérieures; ne fut-ce qu'en disant qu'on n'en parle pas?

15 Morceau qui peut commencer la seconde partie; la subdivision qui forme ainsi un tableau de l'histoire du monde par rapport au gouvernement. Une terre [nouvellement découverte par la mer reçoit d'abord les semences de quelques plantes faibles, qui, en recevant de l'air une nourriture abondante et

en se dissolvant dans la suite, deviennent un principe de fécondité pour la terre qui en produit de plus grands, de vastes forêts, s'élèvent; de siècle en siècle les chênes naissent et périssent, et leurs débris, en se réduisant en poussière, enrichissent la terre des sels et de toute la matière qu'ils avaient reçue de l'air. Ainsi, les premiers hommes dispersés dans les forêts sans lois, sans art, sans industrie ont été soumis par l'ambition des capitaines; des empires se sont formés; des conquérants sans nombre en ont formé de nouveaux qui se sont détruits les uns les autres. La tyrannie poussée à l'excès ici a produit la liberté, là les peuples fatigués de l'anarchie ont été de nouveaux accablés de la tyrannie; mais, dans ces révolutions, dans ces renversements, la masse totale du genre humain s'avancait vers un état plus tranquille et plus heureux; tant de bouleversements, en faisant succéder les uns aux autres tous les états possibles, en rapprochant et en séparant successivement tous les éléments des sociétés politiques, ont contribué à mettre enfin chaque chose en sa place; ce mouvement même, en détruisant les liens qui retenaient tout, a fait que tout s'est placé selon la pesanteur spécifique; les lois approuvées par une longue suite d'observations, perdent dans les révolutions la force qu'elles reçoivent de l'autorité législative pour ne voir plus d'autre force que celle de leur utilité ou de leur conformité avec l'équité naturelle qui seule peut les faire subsister dans la chute des empires auxquels elles doivent leur existence. Ainsi, par des alternatives de calme et d'agitation, de biens et de maux, la masse totale du genre humain marche toujours à la perfection: c'est dans ces temps de crise, lorsque les lois perdent leur autorité, lorsque tous les ordres de l'état sont dans un état de confusion, de mélange, de fermentation; c'est alors que dans le sein de l'anarchie, ils se forment les semences d'un nouveau gouvernement plus ou moins propre au bonheur des hommes selon les principes qu'ils ont fait naître: ici, république, là, monarchique; ici, formé par l'ambition d'un particulier qui s'élève sur les ruines de la patrie; là, l'ouvrage de la vertu d'un prince qui gémit sur les malheurs publics, qui cherche à y porter une main réparatrice. C'est dans cette situation des choses humaines que je veux vous donner un exemple de ce que fait les passions et de ce que fait la Religion dans la naissance des empires et les influences différentes de ces deux principes dans la suite de leur constitution. La République romaine, après avoir comme englouti toutes les nations par une longue suite de victoire, fut enfin vaincue par sa propre puissance après avoir vaincu l'univers. Les richesses de l'Asie avait brisé la seule barrière de l'ambition dans une république, l'égalité des citoyens. Les lois avaient été faites pour gouverner des citoyens et non des rois, une ville et non pas l'univers. Le poids qu'elles avaient soutenu était devenu trop grand; il fallait une révolution; chaque citoyen se croit digne de commander à l'univers; des flots de sang furent versés et ne servirent qu'à cimenter la tyrannie. A Marius succéda Sylla; Pompée, César, Antoine, Octave étaient

comme des vents opposés qui se disputent l'empire de la mer et la bouleversent jusque dans ses fondements. On ne peut lire sans horreur l'histoire de ces temps abominables; les guerres civiles mêmes cessèrent et les Romains ne furent pas plus tranquilles; ils passèrent, dans l'intervalle, d'une liberté affreuse à l'esclavage le plus dur et le plus bas; les ambitieux qui avaient subjugué Rome ne l'avaient pas fait pour la rendre heureuse; ils n'avaient songé qu'à augmenter leur autorité qui, par là, se trouvait abandonnée à toute la fureur des passions des tyrans qui ont eu tant besoin d'être refrénées par les lois que les passions du peuple. Comparez à cette révolution nécessaire que l'ambition a produite dans la République romaine, une autre révolution aussi nécessaire, mais plus douce, plus insensible, exempte de ces agitations terribles qui font agiter le repos si cher: une révolution que la main même de la Religion semble avoir conduit. Français, rappelez-vous ce temps où S^t Louis prit en main les rênes du gouvernement. Les ravages des barbares, puis des Normands, l'esclavage des peuples, les guerres des seigneurs. La fortune et l'honneur des citoyens étaient abandonnées au hasard de ces épreuves bizarres que la superstition appelait le jugement de Dieu, à des caprices de quelques soldats ignorants dont la décision n'était peut-être qu'un autre hasard. Alors, la guerre, ce fléau terrible pénétraient en quelque sorte toute la masse des royaumes: la justice sans principes, etc. Voyez S^t Louis éclairé par sa Religion dans les ténèbres d'un siècle barbare, etc., et reconnaissez que c'est à la Religion que nous devons cette paix dont nous jouissons encore, et voyez la différence de son action et de celle des passions. Repassons sur notre bonheur.

16 Une remarque très vraie, c'est que c'est la Religion chrétienne qui nous a conservé la connaissance des langues anciennes et des connaissances grecques et romaines: peut-être sans la Religion, on ne se souviendrait plus si le Capitole a existé. Cette Rome éternelle est tombée sous les coups des barbares, mais cette Religion qu'elle avait persécutée seule l'a fait se survivre à elle-même; je veux dire son esprit, ses sciences, sa politesse, son génie romain. C'est elle qui, par les mains des moines, nous a conservé tant d'écrits précieux, qui, lors de la renaissance des lettres, nous ont porté tout à coup à ce niveau des anciens et nous ont donné les moyens de les surpasser. Il est sans doute vrai que les sciences ont souffert une éclipse très longue et qu'on pourrait dire que c'est à un esprit de curiosité qui s'est répandu au 15^e siècle et surtout à l'état de paix où l'Europe commença à respirer que l'on doit le renouvellement des sciences. Il a fallu sans doute un long temps pour que les ravages des barbares ne laissassent plus de traces; il a fallu du temps aux mœurs douces et policées des Romains soutenues par le Christianisme pour surmonter la férocité des mœurs barbares, pour faire des Romains de temps de peuples des Romains; mais cette cause pour être lente n'en agissait pas moins qui ne sait que les études des ecclésiastiques ont seules conservé l'intelligence des anciens

auteurs, que c'est même le droit ecclésiastique qui a donné naissance à notre droit civil et qui a substitué la sagesse des lois romaines aux caprices d'un tribunal de soldats grossiers et à la décision du sort dont les hommes préféraient les décisions à leur jugements qui peut-être n'étaient pas moins qu'un autre hasard. Une preuve que la Religion seule a conservé les sciences parmi nous et a fait prendre aux barbares les mœurs romaines, c'est la différence de leurs conquêtes d'avec celle des Turcs: Qu'on voie l'état où ceux-ci ont réduit la Grèce, on peut voir qu'ils composent une nation absolument séparée à cause de la religion de Tartares; ils sont devenus Arabes, mais jamais ils ne deviendront Grecs; au contraire, ils se multiplient, ils font successivement évanouir toute la nation grecque. La barbarie, le despotisme, l'ignorance, la férocité et la paresse de figurant; cette belle contrée qui semblait être la patrie de sciences, des arts et de la politesse. D'où peut venir cette différence, sinon de ce que les vainqueurs des Romains se sont soumis à leur religion, tandis que ceux des Grecs étaient animés par le fanatisme d'une religion destructrice qui consacrait leur barbarie?

17 Les juifs, environnés partout de l'erreur de l'idolâtrie qui inonda l'univers, ils avancent dans la profondeur des siècles; ils traversent cette mer de superstitions dont les flots comme autrefois ceux de la Mer Rouge et du Jordan restent suspendus autour d'eux. comme(sic)

18 Sen. Ep. 7. Casu in meridianum spectaculum incidi lusus expectans et sales et aliquid laxamenti, quo hominum oculi ab humano cruore acquiescant; contra est. Quicquid ante pugnatum est, misericordia fuit. Nunc omissis nugis mera homicidia sunt. Nihil habent quo tegantur, ad ictum totis corporibus expositi numquam frustra manum mittunt. ... Manè leonibus et ursis homines meridie spectatoribus suis obiciuntur. Interfectores interfecturis iubent obici et victorem in aliam detinent caedem.

Après avoir prouvé que les peuples sont plus soumis, mais regardérions-nous l'autorité des rois comme la perfection d'un état? Oubliérions-nous que cet état n'est composé que d'hommes? Inondérions-nous leur bonheur à une vaine chimère d'ordre et de subordination? Non, le cœur des rois dignes de l'être m'en désavouerait; malheur à moi, si j'allais taire ce qu'ils savent ce qui est gravé dans leur âme, si je les croyais capables de s'irriter contre celui qui dit qu'ils sont faits pour le bonheur des hommes! Sans doute le bonheur de ceux-ci a besoin de l'autorité, mais l'autorité n'est faite que pour ce bonheur. Il faut que son usage, etc.(sic)

19 Les vertus à qui la Religion ne donne point une solidité intérieure dans le fond du cœur sont comme les fluides qui s'échappent de tous côtés et qui ont besoin d'être partout soutenues. Les législateurs de la Chine ont cru suppléer à la créance de l'immortalité de l'âme par cette foule de lois minuteuses qui enchaînent tous les moments de la vie humaine. Qu'est-il

arrivé? Rien de mieux réglé que la Chine dans les cérémonies et de plus corrompu dans les mœurs.

20 Les Lacédémoniens traitaient leurs esclaves de la manière la plus barbare qu'on se rappelle la manière indigne dont ils en faisaient le jouet de tous leurs caprices, les dépouillant de tous les droits de l'humanité, de la pudeur même et du droit sacré de la vertu, les forçant de s'abandonner à des vices infâmes, pour en imprimer par cet exemple l'horreur à leurs enfants. Il poussèrent l'avilissement de la nature humaine jusqu'à faire une loi qui permettait de les tuer impunément sans raison, qu'on se rappelle le massacre de ces malheureux Helotes, l'acharnement avec lequel Lacédémone les poursuivait dans tous les asiles que les étrangers leur avaient donnés. Tout cela pour procurer à dix mille citoyens le rare bonheur d'observer rigoureusement les lois de Lycurgue, de ne posséder rien en propre, de vivre aussi durement que nos moines, de faire toujours la guerre sans rien conquérir, etc.: le beau et sage projet.

21 Si les lois qui sont sur la terre ont été faites, ou dans un esprit de système comme celles de Lycurgue et de Confucius, ou par sens à mesure que les circonstances et les abus qu'on découvrait demandaient une loi pour les réprimer, les lois romaines, les nôtres, et puis celles de presque toutes les nations n'ont pas d'autre origine; le plus grand travail que les législateurs aient fait sur elles et qu'ils n'ont pas même toujours fait a été de rassembler toutes ces lois éparses, de les réduire à certains chefs, de les concilier comme ils ont pu. Cependant, il est vrai de dire que les plus sages sont celles où les hommes ont été en quelque sorte conduits par le hasard, sans vues, sans projet fixe, au jour la journée; c'est que les plus grands génies ont des vues bien bornées; c'est qu'il n'y a pas dans le monde de problème plus compliqué que celui du gouvernement et de l'établissement des lois; c'est comme dans le corps humain on voit quelques gros vaisseaux, quelques ramifications principales, mais qui toutes se ramifient en une infinité de filets où se perd leur origine, où sont les principes de leur action, où les préparations et les filtrations des sucs vitaux se forment dans le secret de la nature. C'est ce secret qu'atteint la Religion; elle agit intérieurement; les lois sont un moule qui soutient une liqueur; la Religion lui donne de la solidité. Un législateur systématique est comme un médecin systématique. Dieu seul a des connaissances assez étendues pour suivre des principes, et tous les hommes sont faits pour le tâtonnement de l'expérience: un grand inconvénient des lois systématiques, c'est d'être ordinairement fixées. Un génie, qui regarde ses lois comme son ouvrage, en qui l'amour propre et l'amour du bien public confondus se fortifient l'un l'autre, veut assurer à ses lois une immortalité sur laquelle il fonde la sienne; toutes les parties seront enchaînées les unes aux autres: la religion, la constitution, la vie civile seront perpétuellement mêlées, entrelacées par mille nœuds qu'il sera

impossible de délier et qu'il faudrait nécessairement couper, c'est-à-dire détruire l'état dont toutes les forces deviennent par là le soutien de chaque loi particulière. Mais, pour oser ainsi fermer la porte à toutes les réformes possibles, il faut croire avoir tout prévu, et pour cela, il faut être bien ignorant; aussi, n'est-ce guère que dans la première antiquité ou chez des peuples barbares que nous voyons des législateurs systématiques: Lycurgue, Confucius? Il y a des exemples modernes: le Paraguay, la Pensylvanie; mais, ce ne sont point de grands corps d'états; ce sont des essais faits par des particuliers indépendants. En général, plus les hommes sont bornés et moins ils soupçonnent ce qui leur manque, plus ils se croient être parfaits; aussi, les législateurs anciens n'ont-ils rien épargné pour éterniser leurs lois?

22 En Europe, les conquêtes qui ont donné la naissance à de grands empires ont détruit toutes ces institutions singulières, quand la seule force de la nature ne les aurait pas fait tomber. Plusieurs républiques réunies sous une seule par la domination donnèrent occasion de comparer leurs différentes lois, d'en peser les avantages et les inconvénients; mais, rien ne put changer la constitution civile et l'esclavage n'aurait point été aboli sans la Religion chrétienne. Dans tout pays, les hommes mêmes vertueux payent au préjugé un tribut; on ne s'avise point de crier contre un crime qui est le crime du public. L'utilité des hommes a été le premier principe d'où l'on ait jugé les actions et leurs passions, par conséquent, ont souvent servi de règle. On ne faisait point un crime à un homme de réduire d'autres hommes en esclavage et la moindre tentative de ceux-ci pour rentrer dans leurs droits était un crime atroce. La guerre la plus affreuse n'était point regardée comme un crime: en un mot, les lois n'étaient justes qu'entre ceux qui les faisaient; elles opprimaient les faibles au lieu de les protéger, tels les esclaves, les femmes, les Lacédémoniens, les aristocraties héréditaires, les peuples soumis à d'autres peuples. Avant la Religion chrétienne, on ne considérait point les lois par rapport au bonheur des hommes et c'est elle qui la première a fait envisager la justice comme relative à tous; par elle, les esclaves ont été abolis; tant de lois inhumaines qui sacrifient une partie aux intérêts de l'autre sont aujourd'hui inconnues.

23 Les lois plus sages sont mieux observées, parce que la Religion a donné des mœurs.

24 Les peuples sont plus soumis à l'autorité. Les anciens chrétiens souffrent la mort plutôt que de se révolter.

25 Nouvelle subdivision: les sociétés politiques considérées par rapport à leur constitution civile et par rapport à leur constitution politique, à l'harmonie entre la partie qui gouverne et la partie qui obéit.

26 Le peuple à qui la souveraineté appartient peut-être, mais qui toujours inconstant, toujours aveugle sur ses intérêts, toujours injuste sur ceux des autres, toujours capricieux, toujours enfant a besoin d'un tuteur pour régir

ce qui lui appartient. Bonheur appartient à tous les hommes et le droit de souveraineté n'est que le droit de les fonder sur leur bonheur. La nature a donné à tous les hommes le droit d'être heureux.

27 La nature a donné à tous les hommes le droit d'être heureux, mais le bonheur des hommes: des besoins, des désirs, des passions, une raison qui se combine en mille manières avec ces différents principes sont trop bornés dans leur vues, trop petitement intéressés. Pouvaient-ils seuls faire usage de forces que la nature avait données à chacun pour y parvenir? Ne fallait-il pas qu'une puissance supérieure pût les diriger dans le même chemin et les empêcher de s'y choquer dans leur marche? Voyez cet agent universel de la nature: cette eau qui, répandue parmi les canaux par mille filtres, sert à nourrir les végétaux, à donner aux productions de la terre cette fraîcheur et cette vie qui les embellit, qui sert à transporter ses productions par les fleuves et les rivières; ce principe de fécondité est l'image du principe de force répandu dans tous les hommes, de ces désirs, de ces passions qui les porte au bonheur; mais cet élément bienfaisant, s'il était répandu uniformément partout, ne ferait du globe qu'une vaste mer; il étoufferait les germes qu'il doit développer. Si la pluie du ciel se répand partout, il a fallu que de hautes montagnes s'élevassent, qu'elles rassemblaient autour de leur côtes superbes les nuages et les vapeurs de l'air, qu'elles fussent élevées pour être les sources des fleuves et des rivières et pour diriger par leurs différentes pentes le cours de toutes les eaux qui portent partout la fécondité. Voilà l'image de la souveraineté et le titre des gouvernements. Raison l'a déjà dit: vous êtes élevés pour être la source du bonheur des hommes. De là, toutes les lois destinées à diriger l'action des forces des hommes, de leurs richesses, à combiner leurs différents intérêts, à régler tous les rapports qui forment les familles, qui unissent toutes les parties de la société par l'ordre établi entre les professions différentes, par les rapports de magistrat de citoyens, de maître d'esclaves, de père d'époux, par le transport des biens. D'autres lois sont faites pour assurer la durée et la solidité de l'édifice dont les autres règlent l'ordonnance et le comble de la perfection serait que l'ordonnance devînt le principe de la solidité, que le bonheur des sujets devînt le rempart de l'autorité des rois et la chaîne qui en leur laissant la liberté les empêchât d'en abuser.

[28] Jetons un coup d'œil sur l'histoire du monde et sur les progrès qu'il a fait dans la disposition du gouvernement; [sur] les effets de la nature et les influences de la Religion sur ces deux objets et montrons que la Religion a porté l'établissement des lois à une plus grande perfection et qu'elle a suppléé à leur insuffisance. La nécessité, les intérêts des hommes, leurs passions opposées souvent par lesquelles ont le même but, ont dû faire naître des lois. Les forces inégales ont établi la domination; la domination n'a pu subsister sans lois. Les passions, les préjugés, les raisonnements des législateurs ont fait les lois;

hommes, ils se sont souvent trompés; la plupart ont agi sans principe au jour la journée; ils ont fait les lois pour les opposer aux abus naissants: lois communément trop générales, corrigées ensuite et ramenées à un juste milieu par l'abus de la trop grande généralité. La législation marchait, comme les rivières se font un lit tortueux entre deux chaînes de montagnes, repoussées par l'une, elles se détournent pour en frapper un autre qui les redresse et leurs sinuosités marchent toujours à la mer. Ceux qui ont voulu donner des lois systématiques, embrasser toutes les parties du gouvernement: Lycurgue, Confucius ont encore plus mal réussi. Les plus grands hommes sont entraînés par leur siècle; ils n'ont fait souvent qu'en fixer les erreurs. En tout, les hommes sont faits pour le tâtonnement de l'expérience: c'est par la suite des événements qu'ils ont été menés à la perfection: c'est avec les empires que les lois systématiques sont tombées, élevées sur les ruines les uns [après] des autres: ils se sont succédés et détruits, et la constitution des gouvernements parmi tant de bouleversements a marché à la perfection. J'avoue que la nature seule a pu corriger peu à peu les lois raisonnables; il a fallu que les états tombassent pour renverser les lois. Ces liens que la présomption des législateurs avait formés pour rendre leurs lois immuables se sont rompus. Des empires formés par la guerre, amollis par la paix ont trouvé de nouveaux ennemis qui se sont amollis comme eux. La liberté ici a produit la tyrannie, là le peuple accablé a fait renaître la liberté. Mais, dans ces révolutions, la masse totale du genre humain marchait toujours à la perfection. Ces empires se sont succédés; semblables à ces forêts aussi anciennes que le monde dont l'Amérique est couverte, où les arbres se sont succédés de siècle en siècle, où les débris des anciens, réduits en poudre ont donné à la terre une nouvelle fécondité et à leurs successeurs une plus grande vigueur. Dans cette destruction des empires, les lois ont perdu leur autorité; dans le sein de l'anarchie se forment les principes d'un nouveau gouvernement. Mais, est-il donc l'unique voie que les hommes puissent suivre pour parvenir au bonheur? Et le bonheur des siècles suivants doit-il nécessairement coûter si cher aux précédents? Oui, si la raison seule est leur ressource. Mais la Religion en offre une autre bien différente: ici, apportons l'exemple de la république romaine comparée à l'établissement de l'autorité des rois en France, et mettre les révolutions de Rome avant cette réflexion sur les passions. Mais, non seulement la Religion est plus douce dans la façon dont elle contribue à la perfection, il est encore des abus qu'elle seule peut corriger, il en est qu'elle seule peut déraciner, qui se sont tellement établis par les premiers établissements des lois que toutes les révolutions des états ne les changent pas, pour lesquels il faut une révolution plus intérieure, un changement qui donne de la lumière aux esprits et du courage aux cœurs. Les premiers législateurs étaient hommes et il n'est que trop vrai que leurs lois portent l'empreinte de leurs faiblesses et peut-être leur est-il pardonnable d'avoir quelquefois un problème

aussi compliqué que la législation des états dans cette obscurité profonde que leur raison humaine trop peu expérimentée encore ne pouvait dissiper; peut-être leur était-il pardonnable de suivre quelquefois la lueur trompeuse de leurs passions ou du préjugé qui n'est autre chose que l'expression des passions du peuple. L'utilité publique a été le premier principe sans doute dont on s'est servi pour faire les lois. Mais c'était l'utilité de la société qui faisait les lois qu'on appelait l'utilité publique et c'était moins équité qui apprit aux hommes qu'ils avaient tous les mêmes droits à la liberté qu'équilibre de force entre une foule de tyrans; de là, un grand nombre de lois qui sacrifient inhumainement une partie à l'autre; de là, cette inégalité barbare entre les deux sexes qui règne encore dans l'Orient; de là, la barbarie de l'esclavage où les maîtres avaient sur leurs esclaves droit de vie et de mort; de là, ces horreurs de la guerre et du droit public des anciens; de là, cette tyrannie des grands envers le peuple dans les aristocraties héréditaires; de là, cette oppression des peuples soumis à d'autres peuples; de là, cette violence de la tyrannie et cet emportement de la liberté. C'est que le peuple et les rois ne regardaient qu'eux dans les lois et non pas le bonheur de tous; souvent quand un législateur avait une grande autorité, pour peu qu'il fut homme à système se proposait une gloire ou des vertus chimériques. On voit dans les lois de Lycurgue un exemple de cette folie et de l'oubli des droits de l'humanité sacrifiés à de vaines chimères qui encore ne regardaient qu'un petit nombre d'hommes.

29 Or, toutes ces idées n'ont pu être effacées par les seules révolutions naturelles; les conquérants laissent subsister les lois fondées sur un préjugé commun à leur nation et laissent subsister les esclaves souvent même en fort de nouveaux. Les peuples ne cherchent la liberté que pour eux; ils n'aiment point la liberté pour l'humanité et nulle part les esclaves n'ont été délivrés par aucune révolution. D'ailleurs, il n'arrive guères qu'on s'avise de réfléchir sur l'injustice d'une coutume autorisée par des lois et par la pratique universelle. La Religion seule qui s'établit peut changer là dessus les idées des hommes. Or, la Religion chrétienne est la seule qui ait corrigé cette injustice générale, qui ait fait envisager dans le but des lois le bonheur et les droits du plus grand nombre d'hommes; la seule à laquelle on doive l'abolissement des esclaves partout où ils ont été abolis, parce qu'elle est la seule qui ait mis dans tout leur jour les principes de l'humanité. Mais, ce n'est pas seulement en facilitant les progrès de la législation, en corrigeant des abus qu'elle seule peut corriger que la Religion chrétienne peut être utile aux sociétés, c'est encore plus parce qu'elle supplée à l'insuffisance des lois; parce qu'elle leur donne une force qu'elles ne peuvent avoir dans elles-mêmes; les lois, quelque force qui les appuie, ne sont que des liens extérieurs pour les passions humaines; je crois voir une liqueur bouillante contenue dans un vase dont elle cherche à s'échapper de tous les côtés. La Religion, en agissant sur l'intérieur de l'homme, en le mettant sous

les yeux d'un Dieu qui voit tout, donne à ses vertus une solidité qui les soutient indépendamment des lois. En vain la police chinoise a gêné, a compassé toutes les actions extérieures de la vie; toutes leurs minuties ne suppléeront point au défaut de la religion; on sera cérémonieux à la Chine et corrompu. Tant de police ne donneront point à une nation des mœurs; ces mœurs plus puissantes que les lois, qui engagent sans commander et qui rendent le commandement inutile: les lois captivent, mais elles annoncent en même temps aux passions contre qu'elles doivent buter; les mœurs modèrent sans captiver; elles se forment doucement; elles peuvent être violées, mais elles ne le sont que par le particulier et par un endroit; il ne se fait point de réunion contre elles; elles n'en sont que plus fortes pour n'être point entre les mains d'une autorité visible contre laquelle on puisse se révolter; se révolter contre les mœurs, c'est à la fois se révolter contre le public et contre soi-même; c'est aux mœurs de la Religion chrétienne qu'on doit cet adoucissement du despotisme général partout où elle s'étend. Les anciens ne savaient pas la différence de la monarchie à la tyrannie, dit Aristote et l'histoire des anciennes républiques montre assez qu'ils connaissaient peu celle de la liberté et de la licence. C'est elle qui enfin a fixé les balancements perpétuels des passions entre la tyrannie et l'anarchie; elle a à la fois inspiré la soumission aux peuples; elle en a fait un commandement exprès; elle leur a appris que la raison et leur propre bonheur demandent qu'ils soient soumis à une autorité légitime.

Plan général du Discours sur les avantages que la Religion chrétienne a procurés au genre humain

Exorde. Lorsque Dieu donna autrefois sa loi aux Israélites, ce fut du milieu des foudres et des éclairs. Cependant, cette loi donnée dans un appareil de terreur et de majesté, dure dans ses préceptes, rigoureuse dans ses observances, doit être un jour effacée par une loi plus parfaite et plus digne d'un Dieu: un législateur est promis; il vient; il converse avec les hommes; il leur prêche la douceur et il répand enfin son sang pour eux. O, loi véritablement plus digne de Dieu, puisqu'elle porte avec plus d'éclat l'empreinte de sa bonté; telles sont les voies de la Providence; par quelques routes écartées qu'elle paraisse conduire les hommes, elle sait toujours les faire aboutir à leur bonheur. Hommes indociles, qui ne cessent de censurer la conduite de la divinité dans la dispensation de ses économies, qui cherchent à accuser la Providence pour justifier vos passions et vos crimes. Ne pouvez-vous vous laisser conduire sans murmure à la main d'un père et demandez-vous des gages plus sûrs de sa bonté? Dieu, vous doit-il la compte de sa conduite, etc.? Ne prétendons point en sonder la profondeur; il s'est réservé à lui seul de se justifier pleinement un jour aux yeux de l'univers. Bornés dans nos vues à cette courte apparence qu'on appelle le monde, nous n'avons pas droit de juger l'éternité par un

moment, et moins encore de faire de ce moment un principe d'objections contre la Religion et de nous plaindre que le Christianisme, en promettant aux hommes un bonheur éternel, leur arrache la jouissance de celui que la terre leur présente. Mais, combien plus grande est l'injustice, si cette même Religion est encore la source la plus pure de la félicité du genre humain sur la terre, si l'établissement de la doctrine de Jésus-Christ, en répandant sur la terre le germe du salut éternel, y a versé en même temps les lumières, la paix et le bonheur. Mon but, dans ce Discours, est de répondre à ceux qui se plaignent que le Christianisme est contraire au bonheur du genre humain. J'exposerai donc les avantages que l'univers lui doit. J'envisagerai, dans la première partie, les hommes en eux-mêmes, leur esprit, leur cœur, les rapports que la nature a mis nécessairement entre eux. Je considérerai, dans la seconde, les hommes réunis entre plusieurs corps politiques par les lois et le gouvernement dans l'une et l'autre. Le monde chrétien sera comparé au monde idolâtre, etc.

Première Partie: les hommes 1° plus éclairés, 2° plus vertueux, 3° plus heureux. Commencer par un portrait de l'ignorance profonde où l'univers était plongé, des absurdités de l'idolâtrie, de l'impiété des philosophes, de la dissolution des mœurs, etc.

Les Juifs choisis pour être les dépositaires du salut préservés par une foule de miracles de la contagion, etc.; les Juifs ignoraient la grandeur du trésor qu'ils devaient à la terre et leur orgueil avait resserré dans les bornes étroites de leur nation l'immensité des miséricordes d'un Dieu. Jésus-Christ paraît; il meurt; il réssuscite et sa résurrection devient le signal d'un changement universel du genre humain; douze pauvres pêcheurs triomphent des persécutions et des préjugés du monde entier, etc. Suivons dans le détail les effets de cette surprenante résolution! Peut-on nier que le genre humain n'ait été sensiblement éclairé par l'établissement du Christianisme, que de superstitions, que de créances ridicules ont été bannies, déjà dès que le Christianisme a renversé tous ces temples, toutes ces idoles que les philosophes par leurs raisonnements et les poètes par leurs railleries avaient inutilement attaqués pendant tant de siècles? Ne dirai-je pas des choses dont l'évidence est trop palpable? Mais la Religion n'a pas seulement réformé les idées du peuple, elle est encore supérieure à toutes les sciences de la Grèce. Quelles ténèbres encore dans les opinions des plus grands génies de l'antiquité sur la divinité, sur l'âme et sur toute la métaphysique; quelle obscurité, quelle incertitude dans les raisonnements et quelle hardiesse, quelle bizarrerie dans les idées, des nombres, des atomes, etc. Que ces scolastiques, si décriés par la sécheresse de leur méthode, ont des connaissances plus vastes et plus sûres dans le sein même de la barbarie, c'est ici le triomphe de la Religion. Lorsque les pirates danois eurent détruit le peu de restes de la politesse romaine échappés aux premiers ravages des peuples du Nord, lorsque l'Université de Paris dans sa naissance entreprit de marcher d'un

pas égal dans la carrière de toutes les sciences, l'histoire, la physique et presque toutes les connaissances ne purent percer les ténèbres de ces siècles malheureux; ce fut alors que l'étude de la théologie cultivée dans les écoles florissantes, en particulier dans ce sanctuaire de la faculté, cette science, qui participe à l'immutabilité de la Religion, prêta en quelque sorte son appui à cette partie de la philosophie, qui lui tient de si près, qui entrelace en quelque sorte ses branches avec les siennes, et l'élève à ce point où l'éloquence et le génie de Rome et d'Athènes n'avait pu la porter. O, vous qui touchez des charmes de la belle littérature, chérissez la mémoire de ces deux peuples illustres, vous qui étudiez leurs histoires pour fixer les époques des temps, pour débrouiller le chaos de la chronologie, pour suivre le fil des origines des nations, de la succession des empires, ou bien pour y chercher des leçons de politique ou des modèles de vertu, et vous aussi qui peut-être croyez pouvoir mépriser l'antiquité, mais qui vous êtes servis des découvertes de ses philosophes et même de leurs erreurs comme d'un degré, pour vous élever au dessus de leurs connaissances, rendez grâces à la Religion chrétienne qui seule a transmi jusque dans vos mains tant d'ouvrages immortels, où vous puisez encore des préceptes et les modèles du goût le plus pur, et qui, dans la renaissance des lettres, nous ont épargné les premiers pas toujours si difficiles. Lorsque Rome tomba sous les coups redoublés des barbares du Nord, cette Religion seule qui s'était établie dans ses murs, qui s'était attachée à elle malgré elle-même, la soutint, la fit survivre à sa chute. Par elle, ces vainqueurs féroces déposant leur fierté se soumirent à la raison, à la politesse des vaincus: c'est encore par elle que les Clovis, les Charlemagnes ont civilisé tous les peuples septentrionaux, les ont tiré de leurs forêts, leur ont donné des arts, des sciences, des mœurs et des lois. C'est par elle que la Moscovie a tiré de la Grèce ces premières étincelles de lumière avec lesquelles elle pouvait encore nous paraître barbare, mais qui la disposaient au jour qui l'a depuis éclairée et qui d'ailleurs étaient pour des Scythes errants un progrès prodigieux. Enfin, c'est par la Religion chrétienne que le génie de la Grèce et de Rome, ce génie qui là différenciait d'avec les barbares vit encore aujourd'hui dans l'Europe, et si les ravages inséparables d'une conquête faite par des barbares, si leurs divisions, les guerres civiles, les nouveaux ravages des Normands, le séjour de la noblesse à la campagne, le défaut de commerce, les vices du gouvernement, enfin le mélange de tant de peuples et de leurs langages retinrent l'Europe dans l'ignorance et le mauvais goût, du moins les monuments de génie, les modèles du goût peu consultés peu suivis furent conservés comme des dépôts pour être ouverts dans des temps plus heureux; du moins l'intelligence des langues anciennes subsista pour la nécessité du service divin. Elle demeura longtemps stérile pour le bon goût, mais du moins elle fut conservée comme les arbres dépouillés de leurs feuilles par l'hiver, subsistent au milieu des frimas, et donneront encore des fleurs dans

un nouveau printemps. Jetez d'un autre côté les yeux sur l'Égypte, l'Afrique, la Syrie, l'Asie mineure, la Grèce. Voyez ces nations que la splendeur des arts avait rendues si brillantes disparaître pour ainsi dire de la terre devant les victoires des disciples des Mahomets. Le despotisme, l'ignorance, la férocité, la paresse de figurant; la patrie d'Homère, de Platon, d'Euripide, de Démosthène; les Turcs. Cependant, ces derniers conquérants de la Grèce étaient comme les vainqueurs des Romains sortis du fond du Nord. Mais, ayant pris dans l'Asie la religion des Arabes qu'ils avaient vaincus, animés par le fanatisme de cette religion destructrice qui consacrait leur barbarie, ils ne cessent de travailler en l'étendant à effacer tous les vestiges des sciences et à détruire entièrement ce peuple malheureux et c'est ainsi que non seulement la perfection, mais l'existence même de nos sciences est due à la Religion chrétienne.

Il est remarquable que la Religion chrétienne est la première qui ait fait connaître que la véritable vertu a sa source dans le cœur et qui ait étendu sa sévérité sur les pensées et les sentiments les plus secrets. La première, par conséquent, qui ait appris aux hommes à examiner leur penchants dans leur source et à les extirper avant qu'ils aient pu faire leurs ravages à l'égard de Dieu. Le culte des anciennes religions semble avoir été borné à demander des biens ou à détourner des maux. Le Christianisme est la seule qui ait mis la perfection du culte de Dieu à l'aimer. La vertu des chrétiens est à la fois dégagée de l'orgueil des Stoïciens et des observances pharisaïques. La pureté de leurs mœurs fait un contraste frappant avec les abominations du Paganisme consacrées par les fêtes et par les cérémonies religieuses. On pourrait parler ici du courage des martyrs, de l'humilité chrétienne, vertu inconnue aux anciens. Mais, outre que ces idées paraissent tirer sur le lieu commun, je crois que cette partie doit être regardée principalement comme une réponse aux accusations des ennemis de la Religion et, par conséquent, qu'après avoir dit un mot des vertus intérieures, il faut se tourner tout entier du côté des vertus sociales, de l'humanité, de la charité. Je commencerais, en ce cas-là, par raisonner sur cette vertu que le P. de Montesquieu attribue par exclusion aux républiques et par conséquent aux anciens, vertu qui se réduit à l'amour de la patrie, qui lui-même dans le fond n'était qu'un préjugé de la même espèce que ce qu'il appelle honneur dans les monarchies; un fanatisme national inspiré arbitrairement par les législateurs, amour de sa patrie injuste, puisqu'il donnait lieu aux cruautés monstreuses que les anciens exerçaient envers leurs ennemis. On sait que, chez les Grecs et les Romains, les mots de barbarus, d'hostis étaient synonymes avec celui d'étranger. L'amour de l'égalité n'était point fondé sur le sentiment de la noblesse naturelle des hommes, moins encore sur les idées de l'équité, puisqu'elle était bornée à ceux qui avaient le titre de citoyens. L'amour de sa patrie était moins l'amour du bonheur de ses concitoyens qu'une haine commune pour les étrangers. Je n'appelle point vertu l'ardeur d'une troupe de

brigandage et leur exactitude à partager également le butin. Non, la Religion chrétienne n'inspire point une pareille vertu. Elle veut sans doute qu'on aime son prince et sa patrie, mais les fondements qu'elle donne à cet amour ne sont point les vains prestiges de l'imagination et du préjugé. La nature en est la source. La Providence a répandu dans notre cœur une tendance qui nous fait aimer tous les hommes. Mais, réglant en même temps la pente de notre cœur avec autant de sagesse que de bonté, elle a rendu ce sentiment plus vif pour tout ce qui nous environne de plus près. A proportion que les hommes s'éloignent de nous, cette vivacité du sentiment mesurée sur leurs besoins et sur les nôtres semble comme s'affaiblir en se répandant dans une plus vaste circonférence: hors de la portée de nos secours, qu'ont besoin les hommes de notre tendresse? Ils n'échappent à notre cœur et à nos bienfaits qu'en échappant à notre vue: les forces de notre cœur ont été concentrées autour de nous dans la sphère des objets auxquels nous sommes unis par la reconnaissance des bienfaits reçus ou par le plaisir d'en répandre; de là, cette vivacité graduée du sentiment selon la distance des objets; de là, cet amour de nos parents si vif et si ardent, celui de notre patrie et du gouvernement qui nous protège, amour plus actif peut-être que sensible; enfin, l'amour de l'humanité plus étendu qui paraît plus faible, mais dont toutes les forces partagées se réunissent pour maîtriser notre cœur, aussitôt que le besoin présent d'un malheureux en détermine le cours par la compassion qu'il nous inspire; degrés tous justes quoiqu'inégaux, tous pesés dans la balance équitable de la bonté d'un Dieu. Mais, comment est-il arrivé que des sentiments aussi profondément gravés dans le cœur de l'homme aient été si longtemps obscuris et qu'au bout de 4,000 ans, il ait fallu que Jésus-Christ leur apprit à s'aimer? Ces impressions de la nature assez vives pour faire reconnaître la sainteté de la Révélation devaient-elles l'être trop peu pour la rendre inutile? En effet, cette charité universelle par laquelle tous les hommes ne composent qu'une famille dont Dieu est le père commun n'a point été connue avant le Christianisme. La coutume respectable de l'hospitalité si commune chez tous les anciens peuples était par sa nature bornée à un petit nombre de personnes. C'était une espèce de contrat réciproque par lequel on achetait un droit sur les mêmes services qu'on venait de rendre. La charité chrétienne est bien différente; un des premiers pas de Jésus-Christ dans l'établissement de sa doctrine fut d'abattre les barrières qui séparaient les Juifs des nations étrangères. Il est le premier qui ait enseigné à aimer ses ennemis. Toutes ses actions et ses discours se réunissent à inspirer un amour tendre et effectif pour tous les hommes. S^t Jean, le disciple bien aimé de Jésus-Christ semble avoir mérité cette distinction par son zèle pour la charité; accablé d'années, il se faisait porter dans les assemblées des fidèles; il ouvrait une bouche mourante pour leur dire: *filioli diligila invicem*. C'était une des principales affaires de l'église de veiller sur les besoins des

pauvres et des malades et de leur procurer les secours nécessaires. Pline chargé par Trajan d'examiner la conduite des chrétiens leur rend lui-même un témoignage si glorieux et Julien, ce déserteur de la Religion, propose pour modèle aux païens la charité des chrétiens les uns pour les autres. Trouvera-t-on dans l'antiquité ce qui est si commun dans le Christianisme? Des personnes qui renoncent à leurs biens, à leurs familles, à vivre pour elles, afin de se consacrer entièrement au service des malades dans les hôpitaux; d'autres se donnent tout entiers à l'instruction des enfants; des personnes de la plus haute naissance s'empressent à rendre aux malades les services les plus dégoûtants; sans cette charité, que de citoyens perdus pour l'état, que périraient victimes de leur misère et de l'indifférence des hommes! Dans les temps de contagion où l'on ne peut secourir sans s'exposer, avec quelle ardeur, le zèle de la Religion n'a-t-il pas fait courir tant de personnes de tous les états qui se dévouaient à la mort, pour procurer aux malades les remèdes du corps et les secours de l'âme, pour soutenir ceux qui avaient échappé aux traits de la contagion, à une mort plus cruelle encore, aux horreurs de la faim, pour empêcher que les cadavres des morts ne répandent encore la contagion par l'infection dont ils remplissent l'air, parce qu'on n'ose les ensevelir? On a vu St Louis, lorsque la peste ravageait son camp sur un rivage étranger, parcourir les tentes de ses soldats, les consoler, les servir, porter lui-même des cadavres que personne n'osait toucher et mourir victime de son amour pour son peuple. Dans ces derniers temps, lorsque la peste a ravagé la Provence etc., plusieurs personnes peut-être dans cette assemblée se souviennent d'avoir vu ce spectacle; l'histoire conservera toujours la mémoire de ces médecins qui coururent avec plus d'ardeur dans ces villes affligées porter des secours qu'ils n'auraient pu fuir le danger, de ces prélats, de ces magistrats, etc. Combien ne trouve-t-on pas dans l'histoire du Christianisme d'exemples de ce zèle inconnu aux anciens, qui a porté tant d'hommes à entreprendre des établissements utiles sans aucun intérêt, à faire leur affaire du bonheur d'autrui? Qu'il me soit permis de s'étendre sur le caractère d'un homme donné à ces derniers temps et qui par l'étendue des services qu'il a rendus à l'humanité et à la Religion mérite d'être célèbre dans un discours consacré à l'une et à l'autre, je parle de Vincent de Paul; cet homme dans l'âme duquel la Religion semble s'être imprimée toute entière, avec tout ce qu'elle a de grandeur et d'humiliation, d'austérité et de douceur, avec cette immense charité par laquelle elle embrasse l'univers et ces pratiques, ces observances pieuses par lesquelles elle paraît se concentrer dans l'homme qu'elle veut sauver; cet homme qui ne distinguait dans la Religion rien de grand ni de petit, parce qu'il voyait partout la Religion. Je vois son zèle s'étendre partout où il y a des besoins, s'attacher partout au plus grand besoin. Tout homme qui souffre à un droit sur lui, il cherche ceux des malheureux qui pourraient lui échapper, mais ses vues se portent sur ceux qui

paraissent les plus négligés. Les peuples de la campagne sont l'objet de ses missions; il travaille à la fois à porter la lumière de la foi chez les nations barbares, à soulager les esclaves chrétiens qui languissent dans les fers des Mahométans, à adoucir le sort des Catholiques d'Angleterre gémissants sous la tyrannie d'un usurpateur, à donner des asiles à ceux que leur fidélité à leur roi et à leur religion a obligés de quitter leur patrie. Que d'établissements n'a-t-il pas procurés utiles à la religion et à l'état? Il a le premier assuré des secours spirituels et temporels aux galériens abandonnés à la misère et au désespoir. Que d'enfants que leurs parents avaient abandonnés à la mort deviennent des citoyens utiles! Combien d'écoles établies pour l'instruction de la jeunesse! Combien d'hôpitaux fondés ou rendus plus utiles par ses soins! Admirables effets d'un zèle sans exemple hors de la Religion chrétienne!

Serait-il possible que la Religion chrétienne inspirant un si grand zèle pour le bonheur des hommes, son établissement et ses progrès ne les eussent pas rendus plus heureux? Quel contraste, dès la naissance du Christ, de ce zèle des chrétiens avec l'indifférence des païens pour le bonheur des hommes et les droits de l'humanité! Fut-il jamais une coutume plus détestable que celle de faire combattre des hommes pour donner au peuple le plaisir de les voir mourir? Écoutons pour en sentir toute l'horreur un philosophe païen même: Sen. Ep. 7. Casu in meridianum spectaculum incidi lusus expectans et sales et aliquid laxamenti, quo hominum oculi ab humano cruore acquiescant; contra est. Quicquid ante pugnatum est, misericordia fuit. Nunc omissis nugis mera homicidia sunt. Nihil habent quo tegantur, ad ictum totis corporibus expositi numquam frustra manum mittunt. ... Manè leonibus et ursis homines meridie spectatoribus suis obiciuntur. Interfectores interfecturis iubent obici et victorem in aliam detinent caedem. Exitus pugnantium mors est; ... Quare tam timide incurrit in ferrum? Quare parum audacter occidit? Quare parum libenter moritur? Cependant, une coutume si contraire à l'humanité n'a été abolie ni par Trajan ni par Titus ni par les Antonins. On nous dit que Constantin était un tyran, mais, si cela est, la Religion sait répandre par les mains des tyrans des bienfaits plus grands que la bonté même des meilleurs princes privés de ses lumières: c'est à Constantin, c'est à Jésus-Christ que la terre doit l'abolition de ces affreux divertissements. Quand on se plaint du sang qu'a souvent fait répandre un faux zèle pour la Religion, ces plaintes sont sans doute fondées. Les chrétiens sont hommes; ils ont défendu la Religion avec des armes qu'elle condamne, mais le passage du zèle allumé par la charité, à l'aigreur qui éteint cette charité, passage que l'orgueil humain rend si facile et surtout dans les siècles d'ignorance, en est sinon l'excuse, du moins le motif. La passion, sans justifier les excès, les fait concevoir. Dans les combats des gladiateurs, le sang humain coule pour le plaisir des hommes; des spectateurs sans nombre le demandent à grands cris; ils en repaissent leurs yeux avides;

leur cœur goûte cet horrible plaisir. Est-il possible que cette idée de plaisir ait jamais pu se trouver jointe dans le cœur humain avec la vue du sang et de la mort? Partout où l'empire des Romains s'est étendu, les cirques, les amphithéâtres sont à la fois les monuments de leur goût, de leur puissance et de leur cruauté, semés dans notre Europe; ils marquent pour ainsi dire les traces de leur domination. Ce sont là les restes de la grandeur romaine où les nations contemplent encore avec une curiosité avide et respectueuse la majesté de ce peuple roi. Que les monuments que la Religion a inspirés aux princes, qu'elle a animés de son esprit aux S^t Louis, aux Louis 14 sont différents! Monuments toujours précieux à l'humanité; asiles ouverts de tous côtés au pauvre et à l'orphelin; maisons de charité où les malheureux trouvent un soulagement prompt dans leurs maladies; si votre architecture gothique blesse la délicatesse de nos yeux, vous serez toujours chers aux cœurs sensibles, à la misère des hommes; que d'autres admirent, dans cette retraite que la magnificence de Louis 14 a préparée à ceux qui dans les combats ont sacrifié leur vie et leur santé au service de la patrie, toutes les richesses des beaux arts étalées à la vue des nations et portant notre gloire au niveau de celle des Grecs et des Romains! J'admirerai l'usage de ces arts élevés par l'honneur sublime de servir au bonheur des hommes plus haut qu'ils ne l'ont jamais été dans Rome et dans Athènes. Dans tous les lieux et dans tous les temps, la Religion chrétienne a porté des remèdes aux maux que les hommes regardaient avec indifférence; rien de si commun à la Chine que de voir les parents forcés par la misère à exposer leurs enfants; les lois sont muettes contre cette barbarie. Les missionnaires animés du zèle de la Religion partent de l'Europe, passent les mers et sauvent tous les jours la vie à une infinité de malheureux que l'inhumanité de leurs parents et la stupide indifférence des lois condamnait à périr en naissant. Quel spectacle intéressant pour ceux qui aiment la Religion et le bonheur des hommes, de voir que, tandis que les passions ne cessent de ravager la terre comme dans tous les temps, la Religion seule remédie aux effets de leur fureur, non pas seulement en tenant entre elles un juste équilibre, but que se propose la philosophie sans avoir encore pu l'atteindre, mais en s'opposant à elles, en répandant ses bienfaits où elles ont fait sentir leur rage! Il est inutile de comparer les siècles idolâtres avec ceux du Christianisme: les passions qui seules régnaient sur la terre sont encore les mêmes. Voyons les en opposition avec la Religion; choisissons des événements où l'on puisse voir réunies sous un même point de vue leurs différentes actions et en sentir le contraste: lorsque le Cardinal de Richelieu et Gustave ébranlaient la puissance d'Autriche, tandis que des armées sans nombre tantôt victorieuses tantôt fugitives promenaient la désolation et le ravage d'un bout de l'Europe à l'autre, que les peuples épuisés par les impôts dont il fallait soudoyer de troupes qui les ruinaient en les défendant étaient également foulés par leurs ennemis et par leurs alliés et

même par leurs compatriotes, le seul Vincent de Paul entreprend de porter remède à tant de maux; ses émissaires volent dans toute l'Europe; sa prévoyance active marche partout à la suite des armées pour réparer leurs ravages. Malheureuse Lorraine, Province infortunée, sous la main de nos rois par votre situation et ne connaissant encore que leur puissance entre deux états ennemis, exposée à ressentir le choc de toutes les forces et le théâtre naturel de leurs divisions; victime, alors, des caprices d'un souverain bizarre! Si vous fûtes un exemple funeste des maux que la guerre entraîne, vous ressentirez les effets de sa charité. Les suites de la découverte de l'Amérique ne sont pas un exemple moins frappant du contraste des passions avec la Religion par rapport au bonheur des hommes. Victime de l'ambition et de l'avarice des Européens, de combien d'horreurs et de cruautés! Cette malheureuse partie du monde n'a-t-elle pas été le théâtre? Des nations entières ont disparu de la terre ou sont massacrées impitoyablement et sacrifiées à une politique abominable, ou anéanties peu à peu par la rigueur des supplices ou par le supplice continué d'un esclavage plus dur que la mort, sous des maîtres dont l'avidité brutale ne savait pas même en modérer la rigueur pour en tirer plus longtemps le profit; des rois dépouillés de leur trône expirent dans les tourments de la question; les habitants de provinces immenses sont ensevelis dans les mines. Mais, jetez les yeux sur ces forêts de l'intérieur de l'Amérique qui n'ont point tenté notre avarice: une foule de missionnaires se répandent dans ces vastes déserts; ils traversent des fleuves rapides, escaladent les rochers, s'exposent à tout souffrir pour courir après des hommes grossiers qu'ils veulent rendre heureux. Des peuplades nombreuses se forment de jour en jour: peu à peu, ces sauvages grossiers deviennent hommes et se disposent à devenir chrétiens. La terre inculte est devenue féconde sous des mains devenues industrieuses: un travail sagement ordonné produit des fruits qui appartiennent à la société et qui sont distribués à chacun selon ses besoins qui, par là, deviennent la mesure des richesses. Dans ces climats, les ravages de la guerre et les horreurs de la pauvreté sont inconnus: des lois fidèlement observées y maintiennent à jamais la tranquillité; l'égalité en bannit le luxe et y conserve, avec la liberté, la vertu et la simplicité des mœurs; nos arts s'y répandent sans nos vices. Ainsi, ces peuples des ténèbres profondes de la barbarie ont été portés tout à coup par les mains de la Religion à un bonheur plus grand que celui des nations les plus policées; c'est ainsi seulement [que l'Europe] en portant à l'Amérique sa Religion a pu guérir enfin les plaies qu'elle lui avait faites. On a accusé d'ambition les bienfaiteurs de tant de peuples; mais, si tout ce qu'on dit de leur puissance est vrai, y en eut-il jamais d'appuyée sur des titres plus légitimes? Elle a pour fondement le bonheur des hommes. La Religion chrétienne a adouci les maux qu'elle n'a pu ôter: les guerres sont devenues moins cruelles; on ne massacre plus les prisonniers; on ne détruit plus les villes ennemies; on n'en fait plus les

habitants esclaves. L'Eglise a toujours regardé ces barbaries avec horreur: Théodose a été exclu de la communion pour sa sévérité à châtier une ville rebelle. Louis 7 a fait une pénitence rigoureuse du saccagement de Vitry. Peu à peu, les esprits se sont adoucis. Les blessés des ennemis trouvent dans nos hôpitaux les mêmes soulagements que nos propres soldats. MM. de Belle-Isle et de Neuperg ont su, dans la dernière guerre, en conservant la paix dans le Luxembourg et les trois évêchés, resserrer dans des bornes plus étroites les tristes effets de la guerre et épargner à leur gouvernement des hostilités inutiles pour la décision des affaires publiques. Le bonheur des hommes dépendant beaucoup de la constitution des sociétés politiques, cette idée servira de transition pour passer à la seconde partie.

Seconde Partie. Les sociétés politiques: 1° leur constitution civile, 2° leur durée et leur tranquillité par l'harmonie entre la partie qui gouverne et la partie qui obéit. La perfection d'un état roule sur deux points qui doivent être l'objet du législateur: Le premier comprend ce que j'appelle la constitution civile d'un état ou l'ordre établi par rapport à l'ordre des familles, aux mariages, au partage des biens; ces lois qui statuent sur le rapport de maître à esclave, d'homme à homme, qui lient toutes les parties de l'édifice des sociétés. Les autres sont destinées à y donner de la solidité par un juste équilibre des formes de l'état par l'harmonie de la partie qui gouverne et de la partie qui obéit. Il faut remarquer, avant d'annoncer cette subdivision, la différence qui est entre les lois et les mœurs: les lois qui ne forment qu'un lien extérieur, une espèce de vase qui environne un liquide prêt à s'échapper de tous côtés, et la Religion, qui agissant dans l'intérieur, qui mettant l'homme sous les yeux d'un Dieu, qui pénètre jusqu'aux derniers replis de son cœur, donne à ses vertus une solidité intérieure: or ces mœurs, c'est la Religion seule qui peut les inspirer. Les législateurs de la Chine ont cru suppléer à la croyance de l'immortalité de l'âme par une foule de lois minutieuses qui enchaînent tous les moments de la vie humaine. Qu'est-il arrivé? Rien de mieux réglé que la Chine pour les cérémonies, rien de plus corrompu pour les mœurs.

[これらのチュルゴの未発表資料の調査から発表にいたるまで格別の御配慮をいただいた Monsieur le marquis et Madame la marquise Naurois-Turgot の御好意に心からお礼を申しあげる。

本稿は昭和 47 年度および昭和 48 年度科学研究費による研究成果の一部である。]